

國學院大學學術情報リポジトリ

菅原道真の漢詩における許渾詩の影響：
鴻臚贈答詩および寛平七年唱酬を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-10-22 キーワード (Ja): 菅原道真, 許渾, 平安文学 キーワード (En): 作成者: 胡, 曉暉, Hu, Xiaohui メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000960

菅原道真の漢詩における許渾詩の影響

—鴻臚贈答詩および寛平七年唱酬を中心に—

Influence of Xu Hun's Poetry in Sugawara no Michizane's Poems:
Focusing on the Honglu Responsorial Poems in Gangyo and Kanpyo era

胡 曉 暉

キーワード：菅原道真 許渾 平安文学

Key Words: Sugawara no Michizane Xu Hun Heian period literature

要旨

元慶七年(883)、日本は渤海使を応接するために、菅原道真を治部大輔に任命した。菅原道真らは鴻臚館で渤海の正使である裴頌と贈答し、その一連の詩は鴻臚贈答詩と呼ばれる。また、寛平六年(894)、裴頌は渤海使として二度目の訪日をして道真と漢詩の酬和を繰り返した。従来の研究では道真らの鴻臚贈答詩は白居易の影響を受けることに焦点が当てられてきたが、道真を含む平安時代の文人たちは白居易のみならず、広く中国文学に浸潤した。本稿において、まず鴻臚贈答詩及び寛平七年唱酬の経緯を明らかにした。次に、許渾は晩唐において最も影響力のある詩人の一人として、日本文学にも影響を与えた点を取りあげた。最後に、鴻臚贈答詩および寛平七年唱酬を中心に、道真詩における許渾詩の影響を検討した。

Abstract

In the 7th year of Gangyo (883), Japan appointed Sugawara no Michizane as the Minister of Ceremonial Affairs to receive the Bohai envoys. Sugawara no Michizane and his colleagues exchanged responsorial poems with the Bohai's official envoy, Pei Ting, at the Honglu Hall, and this series of poems is known as the "Honglu Responsorial Poems." Furthermore, in the 6th year of Kanpyo (894), Pei Ting made a second visit to Japan as a Bohai envoy and continued the exchange of Chinese poems with Michizane. Previous research has primarily focused on the influence of Bai Juyi on Michizane and his colleagues' Honglu Responsorial Poems. However, the literati of the Heian period, including Michizane, were not only influenced by Bai Juyi but were broadly immersed in Chinese literature. This paper first aimed to elucidate the background and context of the Honglu Responsorial Poems in Gangyo and Kanpyo era. Next, this paper discussed Xu Hun, who was one of the most influential poets during the late Tang dynasty and explore his impact on Japanese literature. Finally, this paper examined the influence of Xu Hun's poetry on Michizane's poems, with a focus on the Honglu Responsorial Poems in Gangyo and Kanpyo era.

はじめに

渤海国(698～926)は日本に34回の使者を派遣し、その中に第30回(882)と第32回(894)の大使は裴頌である。元慶七年(883)、菅原道真は治部大輔に任命され、渤海使の応接を担当した。菅原道真、島田忠臣らは鴻臚館で裴頌と贈答し、一連の詩は鴻臚贈答詩と呼ばれる。裴頌は道真の詩文を高く評し、「白氏の体を得たり」と述べた。

来章曰、蒼蠅舊讀元台弁。白體新詩大使裁。注云、近來有聞。裴頌云、禮部侍郎、得白氏之體。(『菅家文草』卷二・119(2)「余近敘詩情怨一篇、呈菅十一著作郎。長句二首、偶然見訓。更依本韻、重答以謝。」)⁽¹⁾

また、醍醐天皇も「更有菅家勝白様、從茲抛却匣塵深」⁽²⁾と道真を評価しているため、従来の研究は道真らの鴻臚贈答詩は白居易の影響を受けることに集中している。例をあげると、河野貴美子氏は「島田忠臣、菅原道真の詩と白居易——渤海使との贈答詩を通して」⁽³⁾や「渤海との外交における文事と白居易」⁽⁴⁾などの論文で平安時代文人である道真らの詩文における白居易への受容を考察している。しかし、道真をはじめとする平安文人は白居易のみならず、広く中国文学に浸潤した。本稿は許渾と道真の鴻臚贈答詩・寛平七年唱酬の関係を改めて考えていきたい。

一、鴻臚贈答詩および寛平七年唱酬

渤海国は、現中国東北部、朝鮮半島北部、ロシアの沿海地方にまたがる領土を有し、かつて存在した国である。靺鞨族の大祚榮は建国し、初め振国王と号した

(1) 菅原道真著、川口久雄校注、『日本古典文学大系』72『菅家文草・菅家後集』、岩波書店、1966、P204。

(2) 菅原道真著、川口久雄校注、『日本古典文学大系』72『菅家文草・菅家後集』、岩波書店、1966、PP471-472。

(3) 河野貴美子、「島田忠臣、菅原道真の詩と白居易——渤海使との贈答詩を通して」、『日本古代文学と白居易：王朝文学の生成と東アジア文化交流』収録、勉誠出版、2010。

(4) 河野貴美子、「渤海との外交における文事と白居易」、『中古文学』98、2016。

が、唐から渤海郡王に封ぜられるに及んで(713)、この渤海が国号となった。928年契丹によって滅ぼされた。大武芸(718～737在位)の時代に、唐や新羅と外交的に対立するようになり、渤海が、これらの勢力を牽制する目的で日本へ使者を派遣した。しかし、のち唐との融和がすすみ軍事的な意味合いは薄れ、文化・経済活動が中心となった。『旧唐書』の「渤海靺鞨列伝」は次のような内容を記載している。

渤海靺鞨大祚榮者、本高麗別種也。高麗既滅、祚榮率家属徙居營州。……聖曆中、自立為振國王。……睿宗先天二年、遣郎將崔訢往、冊拜祚榮為左驍衛員外大將軍渤海郡王、仍以其所統為忽汗州、加授忽汗州都督、自是每歲遣使朝貢。……(大曆)十二年正月、遣使獻日本國舞女一十一人及方物。⁽⁵⁾

渤海国は唐に日本の舞女を献上することによって、日渤海関係の親密さが見て取れる。

(一) 鴻臚贈答詩

前述のように、日本朝廷は渤海使を応接するために、菅原道真を治部大輔に任命した。『三代実録』巻43元慶七年四月廿一日丁巳条にこれを記録している。

以從五位上行式部少輔文章博士加賀權守菅原朝臣道真權行治部大輔事、從五位上美濃介嶋田朝臣忠臣權行玄蕃頭事、為對渤海大使裴頌、故為之矣。⁽⁶⁾

同月廿八日甲子条に、「領客使少外記大藏善行等引客徒入鴻臚館。」⁽⁷⁾と渤海使が鴻臚館に安置されたことを記録している。鴻臚館で作成されたいわゆる鴻臚贈答詩の経緯は道真の「鴻臚贈答詩序」(『菅家文章』巻七・555)によって知られる。

元慶七年五月、余依朝議、假称禮部侍郎、接對蕃客。故製此詩序。

余以禮部侍郎、與主客郎中田達音、共到客館。尋安舊記、二司大夫、自非

(5) 後晋・劉昫ら、『旧唐書』、中華書局、1975、PP5360-5362。

(6) 黑板勝美、『新訂増補国史大系』第四巻『日本三代実録』、吉川弘文館、1934、P534。

(7) 黑板勝美、『新訂増補国史大系』第四巻『日本三代実録』、吉川弘文館、1934、P535。

公事、不入門中。余與郎中相議、裴大使七步之才也。他席贈遺、疑在宿構。事須別預宴席、各竭鄙懷、面對之外、不更作詩也。事議成事定、每列詩筵、解帶開襟、頻交杯爵。凡厥所作、不起藁草。五言七言、六韻四韻、默記畢篇、文不加点。始自四月二十九日、用行字韻、至于五月十一日、賀賜御衣、二大夫、兩典客與客徒相贈答、同和之作、首尾五十八首。更加江郎中一篇、都慮五十九首。(後略)⁽⁸⁾

「七步之才」は『世説新語』によれば、曹植の優れた詩文を素早く作る才能を褒める言葉である。ここで裴頠の文才を褒める同時に、自分を含めた日本文人の才能をも誇示している。そのため、あらかじめ準備してくることを避け、対面即席のほかは詩を作らないし、草案もなくして即興で詩を詠み上げた。

外交の場面は、国と国との思惑と面子がぶつかりあう緊張感を伴うものであったはずで、今残されている外交文書をみると、両者の文言の中に微妙な、しかし時に激しい政治的駆け引きが行われていたことが窺える…しかし外交といういわば国際試合に際して作成されたこれらの文書は、贈答詩とともに当時最高レベルの文の「競演」であったとみなすことができよう。⁽⁹⁾

河野貴美子氏が指摘しているように、これは国際試合であり、当時最高レベルの文の「競演」でもあった。『三代実録』に「裴頠高才有風儀」⁽¹⁰⁾と記録されるように、裴頠のような才能に溢れる人物に対抗できる相手を送り出す必要があった日本側は、その結果、菅原道真が治部大輔として登場した。

前述の詩序によると、唱酬は四月二十九日から五月十一日まで続き、道真・島田忠臣という二大夫、坂上茂樹・紀長谷雄という兩典客、江郎中という人および渤海使の作を合わせて59首である。江郎中が誰かについて、学界では論議があるが、加藤順一氏は江郎中を参議大江音人の次子、玉淵に比定する。⁽¹¹⁾ 59首贈答

(8) 菅原道真著、川口久雄校注、『日本古典文学大系』72『菅家文章・菅家後集』。岩波書店、1966、P543。

(9) 河野貴美子、「渤海との外交における文事と白居易」、『中古文学』98、2016。

(10) 黒板勝美、『新訂増補国史大系』第四卷『日本三代実録』。吉川弘文館、1934、P536。

(11) 加藤順一、「菅原道真と「江郎中」——九世紀末官人社会の一齣——」。『芸林』49-1、2000。

詩における道真の作品を時間の順であげる。⁽¹²⁾

- (1)「去春詠渤海大使、與賀州善司馬、贈答之數篇。今朝重吟、和典客國子紀十二丞見寄之長句、感而翫之。聊依本韻。」『菅家文草』卷二・104
- (2)「重依行字、和裴大使被誚之什。」『菅家文草』卷二・105
- (3)「過大使房、賦雨後熱。」『菅家文草』卷二・106
- (4)「夏夜對渤海客、同賦月華臨靜夜詩。題中取韻、六十字成。」『菅家文草』卷二・107
- (5)「醉中脫衣、贈裴大使、敘一絕、寄以謝之。」『菅家文草』卷二・108
- (6)「二十八字、謝醉中贈衣、裴少監、訓答之中、似有謝言。更述四韻、重以戲之。」『菅家文草』卷二・109
- (7)「依言字、重訓裴大使。」『菅家文草』卷二・110
- (8)「夏夜於鴻臚館、踐北客歸鄉。」『菅家文草』卷二・111
- (9)「訓裴大使留別之什。次韻。」『菅家文草』卷二・112

(二) 寛平七年唱酬

『日本紀略』によると、渤海使裴頌らが日本に到着したのは、寛平六年(894)五月七日であつた。同年八月二十一日菅原道真は遣唐使に任命された。寛平七年(895)五月七日癸亥は「渤海客使來著鴻臚館」⁽¹³⁾と記載しているように、渤海使は再び鴻臚館に泊まった。『菅家文草』卷五・419「客館書懷、同賦交字、呈渤海裴令大使。」の題注によれば、道真は紀長谷雄と勅命に従い、鴻臚館へ行って渤海使を応接し、裴頌と十二年ぶりに再会し、漢詩の酬和を繰り返した。道真の詩は次のようである。

- (10)「客館書懷、同賦交字、呈渤海裴令大使。(自此以後七首、予別奉敕旨、與吏部紀侍郎詣鴻臚館、聊命詩酒。大使思舊日主客、將賦交字。一席響應、唱和往復。來者宜知之。)」『菅家文草』卷五・419
- (11)「答裴大使見訓之作。本韻。」『菅家文草』卷五・420
- (12)「重和大使見訓之作。本韻。」『菅家文草』卷五・421
- (13)「和大使交字之作。次韻。」『菅家文草』卷五・422

(12) 加藤順一、「菅原道真『鴻臚贈答詩序』にみる元慶7年の渤海使接待」(『名古屋明德短期大学紀要』14、1999)を参照。

(13) 黑板勝美、『新訂増補国史大系』第十卷『日本紀略』前篇、吉川弘文館、1929、P543。

(14)「客館書懷、同賦交字、寄渤海副使大夫。」『菅家文草』卷五・423

(15)「和副使見訓之作。本韻。」『菅家文草』卷五・424

(16)「夏日餞渤海大使歸、各分一字。探得途。」『菅家文草』卷五・425

上記の鴻臚贈答詩および寛平七年唱酬はいずれも鴻臚館で行ったため、便宜上、以下は鴻臚詩と略称する。

二、許渾と平安文学

許渾(約791～約858)は晩唐の詩人。潤州丹陽県(今の江蘇省丹陽市あたり)の出身で、宰相許圜師の六世の孫にあたる。『唐才子伝』『唐詩紀事』などに生涯が記載されている。晩唐に最も影響力のある詩人の一人であり、『丁卯集』2巻が残っている。『日本国見在書目録』には許渾の別集を見ないが、『千載佳句』に33聯、『和漢朗詠集』に10聯の詩を載せられている。この量は白居易と元稹に次ぎ、唐の詩人の第三位にランクする。後文で『和漢朗詠集』⁽¹⁴⁾に収録されている許渾の詩にも触れることになるため、ここではこれらの十句の詩をあげておく。

177 煙開翠扇清風曉、水泛紅衣白露秋。「秋晚雲陽驛西亭蓮池」(1981: 91)⁽¹⁵⁾

182 一聲山鳥曙雲外、萬點水螢秋草中。「自楞伽寺晨起泛舟、道中有懷」(1981: 93)

187 蒹葭水暗螢知夜、楊柳風高雁送秋。「常州留與楊給事」(1981: 94)

194 鳥下綠燕秦苑寂⁽¹⁶⁾、蟬鳴黃葉漢宮秋。「咸陽城東樓」(1981: 96)

422 青山有雪諳松性、碧落無雲稱鶴心。「寄殷堯藩先輩」(1981: 157)

641 孤館宿時風帶雨、遠帆歸處水連雲。「瓜洲留別李詡」(1981: 214)

650 年長每勞推甲子、夜寒初共守庚申。「贈王山人」(1981: 216-217)

684 千里往來征馬瘦⁽¹⁷⁾、十年離別故人稀。「贈河東虞押衙二首」(1981: 226)

736 昔年顧我長青眼、今日逢君已白頭⁽¹⁸⁾。「贈河東虞押衙二首」(1981: 240)

(14) 川口久雄、志田延義校注、『日本古典文学大系』73『和漢朗詠集 梁塵秘抄』、岩波書店、1981。

(15) 詩題は羅時進『丁卯集箋証』(中華書局、2012)による。以下同。また、括号内の数字は西暦と本のページ数である。以下同。

(16) 『丁卯集箋証』では「秦苑夕」に作る。

(17) 『丁卯集箋証』では「萬里」に作る。

(18) 『丁卯集箋証』では「盡白頭」も作る。

755 車前驥病驚駘逸、架上鷹閑鳥雀飛⁽¹⁹⁾。「寄當塗李遠」(1981: 245)

また、『江談抄』には許渾の詩が二箇所で言及されている。まず、第四に次のような内容がある。

青山に雪ありて松の性を諳んず 碧落に雲なくして鶴の心に称へり
許渾 殷堯藩に寄す

許渾の詩は多く一体なり。詩の後に、文時これを許渾の作と謂ふ。ただしこの句に至りては、体すこぶる他の詩に異なれりと云ふ。

一樽酒は尽く青山の暮 千里書は廻る碧樹の秋

許渾 郡園の秋日、洛中の友に寄す

この句は許渾集に両三所に在り。「洛中の友に寄す」、また「元書上人の蘇州に帰るを送る」なり。⁽²⁰⁾

次、第五にも許渾の詩を簡単に触れている。

僕曰はく、「許渾集に「一樽酒は尽く青山の暮。千里書は廻る碧樹の秋」の句、三か所に在り」と。⁽²¹⁾

これに対して、森岡ゆかり氏は第五の記事が見え、「平安中期に許渾詩が読まれていたことがわかっている。しかも三個所に同じ句があることを指摘しており、許渾詩が断片的にはなく、集として、日本に将来し、子細に読まれていたであろうことが推察できる。」⁽²²⁾さらに、第四及び第五ともに「許渾集」に言及し、氏の推測を支えると思われるしかない。また、氏は「日本における許渾詩受容を示す幾つかの資料について」で述べているように『伊勢物語』にも影響が認められる

(19) 『丁卯集箋証』では「鳥雀高」に作る。

(20) 大江匡房著、後藤昭雄・池上洵一・山根對助校注『新日本古典文学大系』32『江談抄』、岩波書店、1997、P162。

(21) 大江匡房著、後藤昭雄・池上洵一・山根對助校注『新日本古典文学大系』32『江談抄』、岩波書店、1997、P172。

(22) 森岡ゆかり、「『千載佳句』・『和漢朗詠集』所収許渾詩本文をめぐって」、『汲古古典研究会』37、2000。

などから、単に『和漢朗詠集』に収める詩人の一人としてのみならず、すでに平安前期、ある程度の知名度を有していたと推測できる。⁽²³⁾

『伊勢物語』が許渾詩の影響を受けていることは、早くも上野理氏・宮谷聡美氏の「伊勢物語と漢文学」で指摘されている。四十五段の「ゆくほたる雲のうへまで行くべくは秋風吹ふくと雁に告げ来せ」は「常州留與楊給事」の「蒹葭水暗螢知夜、楊柳風高雁送秋」や「長恨歌」の「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑尽未能眠」を典拠とする。⁽²⁴⁾ また、杉本元明氏は「蒹葭水暗螢知夜」をはじめ、「碧落無雲稱鶴心」、「蟬鳴黃葉漢宮秋」という三つの詩句における和歌への影響を分析している。代表的な和歌の例をあげると、「よるをしるほたるはおほくとびかへどおぼつかなしやさみだれのやみ」(『相模集』)、「雲晴れてなぎたる空をとぶ鶴の心になふ音をやなくらん」(『竹風和歌抄』)⁽²⁵⁾、「声立てて鳴かぬばかりぞ物思ふ身は空蟬に劣りやする」(『狭衣物語』)はそれぞれ上記の詩の受容が見られる。⁽²⁶⁾

故に、許渾の詩は平安時代の文人層に愛読され、彼らの作品にも影響を与えた。しかし、前述のように今までの研究は和歌への影響に集中し、漢詩への影響があまり論じられていない。また、許渾の詩自体に関する研究⁽²⁷⁾が少なくないが、日本漢詩への影響についてまだ研究する余地がある。

三、鴻臚詩の表現——許渾を中心に

本節では鴻臚贈答詩および寛平七年唱酬という鴻臚詩をめぐる、許渾の菅原道真への影響を検討したい。

(23) 森岡ゆかり、「日本における許渾詩受容を示す幾つかの資料について」、『中唐文学会報』7、2000。

(24) 上野理・宮谷聡美、「伊勢物語と漢文学」、『和漢比較文学叢書』12『源氏物語と漢文学』収録、汲古書院、1993。

(25) 鎌倉幕府の将軍であった宗尊親王の歌のため、時代がやや遅れている。

(26) 杉本元明、「蒹葭水暗螢知夜——中世以前の漢詩受容について」、『江戸漢詩：影響と変容の系譜』収録、ベリカン社、2004。

(27) 例を挙げると、金沢典子氏「『千載佳句』許渾詩校異」(『文学研究論集』46、2016)、馬曉地氏「古人的誤讀與卓識：也說“許渾千首濕”」(『東北大學中国語學文學論集』13、2008)、森岡ゆかり氏「伝小野道風筆許渾詩本文について」(『和漢比較文学』26、2001)、加藤国安氏「許渾の幸福の報償詩——「清麗」か「浅陋」かをめぐって」(『集刊東洋学=Chinese and oriental studies』85、2001)などがある。

（一）「酬河中杜侍御重寄」

元慶七年（883）、日渤双方の文人たちは四回の唱酬を行い、道真の「夏夜對渤海客、同賦月華臨靜夜詩。題中取韻、六十字成」は三回目の唱酬で詠まれた詩である。「月華臨靜夜」は梁・沈約の「應王中丞思遠詠月」詩の一句であり、『文選』卷三十に収録され、全詩は「月華臨靜夜、夜靜滅氛埃。方暉竟戶入、圓影隙中來。高樓切思婦、西園遊上才。網軒映珠綴、應門照綠苔。洞房殊未曉、清光信悠哉。」⁽²⁸⁾である。道真の詩題によれば、その詩は「月華臨靜夜」から韻を取り、六十字、即ち五言十二句の詩を作ることがわかっている。

「酬河中杜侍御重寄」は大中（847～860）後期、許渾は郢州刺史を勤めていた時に詠んだ作品であり、「酬和杜侍御」と連作である。河中は地名で、今の山西省永濟県にあたる。杜侍御はこのたび襄陽府（今の湖北省襄陽市あたり）へ行き、許渾の滞在地を通り過ぎた。⁽²⁹⁾道真の「夏夜對渤海客、同賦月華臨靜夜詩。題中取韻、六十字成」は「酬河中杜侍御重寄」からの影響が見られる。

酬河中杜侍御重寄

五色如絲下碧空、片帆還繞楚王宮。
文章已變南山⁽²⁾霧、羽翼應搏北海⁽²⁾風。
春雪預呈霜⁽¹⁾簡白、曉霞⁽¹⁾先染繡衣紅。
十千沽酒留君醉、莫⁽³⁾道歸心似轉蓬。⁽³⁰⁾

夏夜對渤海客同賦月華臨靜夜詩題中取韻六十字成

舉眼無雲靄、窓頭翫月華。
仙娥弦未滿、禁漏箭頻加。
客座心呈露⁽¹⁾、坏行手酌霞⁽¹⁾。
人皆迷傅粉、地不弁晴沙。
縱望西山⁽²⁾落、何瞻北海⁽²⁾家。
閑談知照膽、莫⁽³⁾勸折燈花。⁽³¹⁾

(28) 花房英樹、『全釈漢文大系』29『文選（詩騷編）』四、集英社、1986、PP431-432。

(29) 唐・許渾著、羅時進箋証、『丁卯集箋証』、中華書局、2012、P557。

(30) 唐・許渾著、羅時進箋証、『丁卯集箋証』、中華書局、2012、P559。

(31) 菅原道真著、川口久雄校注『日本古典文学大系』72『菅家文草・菅家後集』、岩波書店、1966、PP192-193。

(1)「呈霜」、「曉霞」と「呈露」、「酌霞」。

『説文解字』に「呈は平なり」と説明し、段玉裁注は「示なり、見なり」と注をつける。また、『広韻』に「呈は顯なり」と解釈する。つまり、呈は顯現する、の意である。『文選』卷十九曹植「洛神賦」に「延頸秀項、皓質呈露。」⁽³²⁾とあり、前述の「七步之才」に加え、曹植の影響も見える。両詩は同じ動詞を使うほか、「露」と「霜」は寒くて白く、「霞」は暖かくて赤く、詩語の相似性が見られる。なお白と赤のコントラストは、許詩によく見られる表現である。例をあげると、「李生棄官入道因寄」詩の「寒暑丹心外、光陰白髮中」⁽³³⁾及び「送友人罷舉歸東海」詩の「海風吹白鵲、沙日曬紅螺」⁽³⁴⁾などがある。

(2)「南山」、「北海」と「西山」、「北海」。

まず、二詩ともにある「北海」は北方の海であり、特に『莊子』「逍遙遊」における「北冥」と関連する。「北冥有魚、其名為鯢。……化而為鳥、其名為鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。」⁽³⁵⁾「羽翼應搏北海風」はこの典故を詠んでいる。

次に、「南山」は劉向『列女伝』卷二「陶答子妻」の「妾聞南山有玄豹、霧雨七日而不下食者、何也。飽其志、飢其腹、將欲以澤其毛衣而成文章也。故藏而遠害。」⁽³⁶⁾を典拠とする。なお「西山」について、『日本国語大辞典』（第二版）によれば、日本の「西山」は特に、平安京または京都市の西方に連なる山。しかし、律詩の頷聯は対句のため、「西山」は伯夷、叔齊が隠居する首陽山を指すと思われる。『史記』「伯夷列伝」に「武王已平殷亂、天下宗周。而伯夷叔齊恥之、義不食周粟。隱於首陽山、采薇而食之、及餓且死作歌。其辞曰、登彼西山兮、采其薇矣。以暴易暴兮、不知其非矣。神農・虞・夏、忽焉没兮、我安適歸矣。于嗟徂兮、命之衰矣。」⁽³⁷⁾とある。『文選』卷五十五陸機「演連珠」之四八に「是以吞縱之強、不能反蹈海之志、漂鹵之威、不能降西山之節。」⁽³⁸⁾とある。

(32) 高橋忠彦、『新釈漢文大系』81『文選（賦篇）』下、明治書院、2001、P368。

(33) 唐・許渾著、羅時進箋証、『丁卯集箋証』、中華書局、2012、P179。

(34) 唐・許渾著、羅時進箋証、『丁卯集箋証』、中華書局、2012、P240。

(35) 金谷治、『莊子』（一）、岩波文庫、2013、P17。

(36) 山崎純一、『新編漢文選 思想・歴史シリーズ 列女伝』上、明治書院、1996、P269。

(37) 水沢利忠、『新釈漢文大系』第88巻『史記』八、明治書院、1990、P34。

(38) 小尾郊一、『全釈漢文大系32』『文選（文章編）』七、集英社、1986、P214。

(3) 「莫」。

二詩の最後の一句は同じく「莫」があり、「莫勸」「莫道」のように「言わない」という意味を伝えている。

上記のように、道真の詩は、許渾の詩語を盛り込んでいる。

(二) 「贈河東虞押衙二首」

元慶七年、渤海使が帰途に就く前日の五月十一日に、双方が四回目の唱和を行った。道真は真情をこめて「訓裴大使留別之什、次韻」を作った。その頸聯「高看鶴出新雲路、遠妬花開舊翰林」⁽³⁹⁾は裴頴の明るい未来を祈った。高松寿夫氏は「高一、遠一」及び「新一、舊一」は道真に頻繁に用いられているに対し、前者は中国における作例にこの対偶はほとんど例を見ないと指摘しているが、⁽⁴⁰⁾ 実際に、許渾はこの二つの対偶を愛用する。「高一、遠一」の用例は次のようである。

高樹曉猶密、遠山晴更多。 「早秋三首・其一」(2012: 6)

遠帆春水闊、高寺夕陽多。 「潼關蘭若」(2012: 149)

秋色寄高樹、書陰籠近(イ遠)山。 「綠蘿」(2012: 258)

梧楸遠近千官冢、禾黍高低六代宮。 「金陵懷古」(2012: 295)

高樹有風聞夜磬、遠山無月見秋燈。

「南亭夜坐貽開元禪定精舍二道者」(2012: 344)

高岫乍疑三峽近、遠波初似五湖通。 「朱坡故少保杜公池亭」(2012: 345)

青嶂遠分從地斷、洪流高瀉自天來。 「晚登龍門驛樓」(2012: 445)

また、「新一、舊一」の作例は次のように見られる。

開門新樹綠、登閣舊山青。 「送僧歸敬亭山寺」(2012: 211)

樹棲新放鶴、潭隱舊降龍。 「舟次武林寄天竺僧無畫」(2012: 251-252)

長覆舊圖棋勢盡、遍添新品藥名多。 「贈茅山高拾遺」(2012: 328)

(39) 菅原道真著、川口久雄校注『日本古典文学大系』72『菅家文草・菅家後集』。岩波書店、1966、P196。

(40) 高松寿夫、「渤海使関係詩注釈稿 菅原道真「訓裴大使留別之什 次韻」(『菅家文草』112)」。『早稲田大学日本古典籍研究所年報』第3号、2010、PP22-23。

東堂舊屈移山志、南國新留煮海功。

「送嶺南盧判官罷職歸華陰別墅」(2012: 338)

琴倚舊窗塵漠漠、劍橫新冢草離離。「傷李秀才」(2012: 446)

讀書新樹老、垂釣舊磯平。「重哭楊攀處士二首 其一」(2012: 238)

舊精鳥篆諳書體、新授龍韜識戰機。「贈河東虞押衙二首 其一」(2012: 538)

郢中白雪慚新唱、塗上青山憶舊遊。「酬副使鄭端公見寄」(2012: 545)

黃卷新書芸委積、青山舊路菊離披。「送人之任邛州」(2012: 600)

斧鉞舊威龍塞北、池臺新賜鳳城西。「貴遊」(2012: 625)

雲鳴新放鶴、池臥舊降龍。「宣城開元寺贈元孚上人二十韻」(2012: 658)

その中に、特にあげたいのは「贈河東虞押衙二首」である。許渾は宣州(今の安徽省宣城市あたり)に宦遊していた時に作った作品である。其詩の「萬里往來征馬瘦、十年離別故人稀」及び「昔年顧我長青眼、今日逢君已白頭」は前掲のごとく、『和漢朗詠集』に収録され、知名度がともかく、その趣が平安文人にも認められている。

其一

長劒高歌換素衣、君恩未報不言歸。

舊精鳥篆諳書體、新授龍韜識戰機。

萬里⁽¹⁾往來征馬瘦、十年⁽¹⁾離別故人稀。

平生志氣何人見、空上西樓望落暉。

其二

吳門風水各萍流、月滿花開懶獨遊。

萬里山川分曉夢、四隣歌管送春愁。

昔年顧我長青眼⁽²⁾、今日逢君已(イ盡)白頭⁽²⁾。

莫向尊前悲易水、古來投筆盡封侯。⁽⁴¹⁾

道真の鴻臚詩にはこの詩と重なる要素が多い。「新一、舊一」はともかく、ここではかの詩語をあげて検討する。

(41) 唐・許渾著、羅時進箋証、《丁卯集箋証》、中華書局、2012、PP538-539。

(1) 「萬里」、「十年」。

「重依行字、和裴大使被誚之什」の頸聯は「千年豈有孤心負、萬里當憑一手章」⁽⁴²⁾であり、同じく虚数を表す数字プラス里・年の組み合わせである。

(2) 「長青眼」、「已白頭」。

「夏日餞渤海大使歸、各分一字。探得途」の頷聯「送迎每度長青眼、離會中間共白鬚」⁽⁴³⁾に相似する用例がある。「青眼」は自分の好む人や尊重する人を迎えるとき、うれしい心のあらわれた目元である。『晋書』「阮籍伝」の「籍又能為青白眼。見禮俗之士、以白眼對之。及嵇喜來弔、籍作白眼、喜不懌而退。喜弟康聞之、乃齋酒挾琴造焉。籍大悅、乃見青眼。」⁽⁴⁴⁾を典拠とする。「白頭」と「白鬚」は同じく自分の老いを述べた言葉である。「頭」「鬚」という異なる字が使われるのは、押韻のためである。「贈河東虞押衙二首・其二」は「尤」韻を押し、「夏日餞渤海大使歸各分一字探得途」は「虞」韻を押ししている。

なお、「青眼・白頭」は許渾のほかの詩にも見える。例えば、「下第貽友人」の「馬氏識君眉最白、阮公留我眼長青」⁽⁴⁵⁾及び「送林處士自閩中道越由雪抵兩川」の「書劍少青眼、煙波初白頭」⁽⁴⁶⁾などがある。

前掲のごとく、許渾詩の多くは友人に贈った作である。鴻臚詩は、菅原道真と裴頌との友情を詠んだが、行間に漂っている別れの憂いが許渾詩と同調すると思われる。

おわりに

菅原道真は白居易のみならず、広く中国文学を吸収している。本稿は鴻臚贈答詩および寛平七年唱酬を中心に、道真詩における許渾詩の影響を検討した。道真詩は、特に前掲の「酬河中杜侍御重寄」と「贈河東虞押衙二首」に重なる詩語が多い。許渾の二詩は友人に贈った作品であり、菅原道真と裴頌の「交友」の感情と

(42) 菅原道真著、川口久雄校注『日本古典文学大系』72『菅家文草・菅家後集』。岩波書店、1966、P191。

(43) 菅原道真著、川口久雄校注『日本古典文学大系』72『菅家文草・菅家後集』。岩波書店、1966、P436。

(44) 唐・房玄齡ら、『晋書』五。中華書局、1974、P1361。

(45) 唐・許渾著、羅時進箋証。《丁卯集箋証》。中華書局、2012、P444。

(46) 唐・許渾著、羅時進箋証。《丁卯集箋証》。中華書局、2012、P672。

一致している。これは道真が作詩したときに許渾の作を連想した理由だと思われる。

本稿にはいくつかの不足点が残っている。鴻臚詩以外の道真詩に許渾詩の影響があるかどうか、本稿は触れていない。また、「訓裴大使留別之什。次韻」の首聯「交情不謝北溟深、別恨還如在陸沈」は『高常侍集』卷七「送柴司戸充劉卿判官之嶺外」の「別恨隨流水、交情脫寶刀」⁽⁴⁷⁾と重なる詩語が見える。道真詩は高適詩の影響を確認できるかどうか、今後の課題として研究し続けたい。

参考文献

- 河野貴美子、「渤海との外交における文事と白居易」、『中古文学』98、2016。
- 加藤順一、「菅原道真『鴻臚贈答詩序』にみる元慶7年の渤海使接待」、『名古屋明德短期大学紀要』14、1999。
- 森岡ゆかり、「『千載佳句』・『和漢朗詠集』所収許渾詩本文をめぐって」、『汲古古典研究会』37、2000。
- 森岡ゆかり、「日本における許渾詩受容を示す幾つかの資料について」、『中唐文学会報』7、2000。
- 上野理・宮谷聡美、「伊勢物語と漢文学」、『和漢比較文学叢書12 源氏物語と漢文学』、汲古書院、1993。
- 杉本元明、「兼葭水暗蛩知夜——中世以前の漢詩受容について」、『江戸漢詩：影響と変容の系譜』、べりかん社、2004。
- 高松寿夫、「渤海使関係詩注釈稿 菅原道真「訓裴大使留別之什 次韻」(『菅家文草』112)」、『早稲田大学日本古典籍研究所年報』3、2010。
- 河野貴美子、「島田忠臣、菅原道真の詩と白居易一渤海使との贈答詩を通して—」、『日本古代文学と白居易：王朝文学の生成と東アジア文化交流』、勉誠出版、2010。

(47)『四部叢刊』集部『高常侍集』卷七。商務印書館、1929。